



## 超話題ドラマ「おっさんずラブ -in the sky-」 演出として参戦した成田出身 Yuki Saito 監督スペシャルインタビュー 制作現場で個性あふれる俳優陣との撮影秘話に迫る！

2019年末に放送を終えたばかりのドラマ「おっさんずラブ -in the sky-」(3話・6話・7話)で演出を手がけたYuki Saito監督に新春スペシャルインタビュー！

おっさん同士の究極ラブストーリーに笑いと涙が止まらない！再び世間を賑わせていますね。

ありがとうございます！僕自身、フィナーレの最終話に向けて物語が上昇していく大事な6,7話を2週連続でまかせてもらえて嬉しかったですし、何とかその期待に応えないと奮闘しました。旬の俳優陣と個性的なスタッフが一つになって、現場でも泣いたり笑ったり、楽しく自由に和気あいあいと作ったものが、視聴者と共に鳴して世に広がっていく。そんなテレビドラマの良さに、今回改めて気付かされました。

「春田」と「黒澤」の最強タッグからやっぱり目が離せなかった(笑)現場での臨場感が伝わってきますね！

はい。ドキュメンタリーに近い感覚で、俳優の生の演技を切り取るように心がけています。一番最初に「段取り」と呼ばれる工程で試しにキャストが動いてみるんですけど、まずはほとんど演出せずに自由に動いてもらいます。ぶわあーっと即興でぶつかり合う感じで。これがまるで特等席で舞台を観ているような、と

とにかく面白くて最高なんですよ。この感動をしっかりと視聴者に届けられるように、どういうカット割りでこの話を伝えるかを決めていくようにしています。段取りの時にキャストが「こんな顔してるんだあ」「こんなリアクションするんだあ」というのを感じ取りながら、そうくるんだったらこうするよみたいな、カメラの向きや照明の当て方等こっちもアドリブで応えていくんです。もちろん色々プランニングして現場には行くんですけど、受けるようにカメラに収めていくっていう感覚をすごく大事にしています。

キャストにはまず、「自由で良いんだ」ということを最初に伝えていきます。それは僕たちがその時にその場所で起きたことを信じているからです。ただ、撮影初日から急に出来るわけではありません。今作も座長の田中圭くんを中心に、芝居を重ねながら変わっていきました。徐々に和らいでいってみんなで「やってやろう！」っていう空気に。後半はどんどん盛り上がっていましたね。

今作からの新キャスト“成瀬”と“四宮”との印象的なエピソードを教えてください。

成瀬(千葉雄大)が、6話で想いを寄せる四宮に「いい加減人の気持ちを弄ぶのはやめろよ」と拒絶された

時に、「本気だよ」と応えるシーンには痺れましたね。あえて強くは言わない何とも言えないトーンに、心搖さぶられました。最初からそう決めていたわけじゃ無いんですけど、成瀬を撮る時にこう考えるようにならんです。人とはコミュニケーションがとれない人型ロボットが春田の真っすぐな想いに引き出され心を取り戻していく、と。最初はまるで機械のような動きでしたが、段々と人間的な動きや目になり、感情が浮かび上がっていました。

千葉雄大くんのシーンでは、まるで女優さんを撮っているような感覚もありましたね。感情の出し方がすごく情熱的で、じわじわ涙をためていって絶妙なタイミングで涙が流れたりするんです。正直ちょっと好きになっちゃいました(笑)監督の心を揺さぶるっていうのは彼の技量もありますし、自然と自分も綺麗に撮ってやろうっていう気持ちになりました。

四宮(戸次重幸)は、6話で春田と別れ際に手を繋ぐという大切なシーンが特に印象的に残っています。戸次重幸さんは、以前に僕が連ドラで監督をやった時に主演して頂いたこともあったので、今作では今まで見たことの無いような戸次さんを撮りたいと思っていました。戸次さんのお芝居は演出的観点を持ちながらとことんストイックに準備してくるので、そこ

### Yuki Saito プロフィール

1979年千葉県生まれ。高校卒業後に渡米、Columbia College-Hollywood卒。短編映画ではSSFF & Asiaで4度の「観客賞」を受賞、これまでに世界各国200以上の映画祭で上映される。2014年、カンヌ広告祭でゴールドを受賞。2016年、川端康成原作「古都」で商業長編デビューを果たし、文部科学省特別選定映画に選出される。2018年、「おっさんズラブ」がTwitter世界トレンド一位となる大反響を呼んだ。さらに、同作でザテレジョン・ドラマアカデミー賞監督賞を受賞。

を壊して新しい戸次さんを撮ることを目標にしました。現場ではカメラの外でも全力で芝居してくれた田中圭くんにも引っぱられ、四宮というキャラクターにありのままの戸次さんの感情が重なって一つになったような気がして、自分史上最高の戸次さんが撮れたと実感できました。四宮が泣いているシーンは、まるで戸次重幸さん本人が泣いているように見えました。その瞬間、自分もモニターを見ながら涙していました。監督として、こういう瞬間を撮りたかったんだなあと思います。

**そして、キャプテン“黒澤”こと吉田鋼太郎さんの振り切った演技は今作も健在ですね。**

6話のパッティングセンターでのシーンは僕も大笑いしちゃいました！各々すれ違い恋に行き詰った4人が一緒になる気まずい場面で、黒澤キャプテン(吉田鋼太郎)が「4番ファースト黒澤」とアナウンスして打席に行くっていうシンプルな台本だったんですが、ここからの吉田鋼太郎さんのアドリブが最高でした。売り子からヤジまで野球場の一人芝居が始まっています。これには他のキャストも「一体、何が、起きてるの？」みたいに一瞬固まって、必死に笑いをこらえていました。段取り中はスタッフみんなも大笑い、僕も笑いすぎて泣きました。本番ではさらにアレンジが加わって、そのままそれを撮りました。やはり吉田鋼太郎さんは芝居の皇帝です！

6話で黒澤と成瀬が火鍋を囲むシーンにもこだわりました。ここは大きなタランティーノ監督に敬意を込めて“キル・ビル”をイメージしています。実は画面上の配置が全てシンメトリー（左右対称）になっていて、黒澤側に年配者を成瀬側に若者を並べたり、調理の煙まで意図的に作り込んだんです。このエネルギーッシュなシーンで、吉田鋼太郎さんに「キル・ビルのイメージです。武将になったつもりでいてください」と伝えると、「わかった」と一言で理解してくれました。監督の言うことを真正面から受け止めてくれて、予想を越える芝居を目の当たりにしちゃうと、そりやあ胸が熱くなりますよね。

**最後に、春田役で主演の田中圭さんについて教えてください。**

圧倒的な存在です。彼からは何があっても俺が受け止めるっていう覚悟を感じられます。3話の撮影中に記者会見があったんですけど、我らが座長・田中圭は、まだ撮影も始まったばかりだったので、「今作はパワーアップします」という媒体の前で言い切ったんです。最もプレッシャーを感じているであろう座長がそれを言ったことに感銘を受けました。僕自身、気合い充分で撮影に入っていましたけど、少し不安を抱える部分もあったので。その瞬間に切り替わって、この人を支え、この人に付いていきたいと強く思

いました。そして、見守っていた全てのスタッフも「やってやろう」という一体感に包まれました。

前作での春田は、周りに振り回されながらいつも受け身で、最後の最後にやっと行動できたんです。今作では、春田自身が思い悩んで、切なくて落ち込むけど、みんなに励ましてもらって自ら行動していきます。今作の春田はすごく大人ですね。そして、その心優しいキャラクターは僕の感覚では田中圭くん自身に似ていると思います。不器用ながらも相手のことを第一に考え、いろんな人の為を思って行動し、壁を打ち破っていく。人間として器が深い、男前です。

7話で春田と成瀬が手を繋ぐシーンのこと。付き合ってもいないのに手をつなぎ、そしてポケットの中に手を突っ込んで歩く。まるで漫画のようなこんなシーンをどうやったら自然にできるんだろうっていう葛藤が田中圭くんにあったので、そこは2人でじっくりと話し込みました。圭くんがそうやって言う時って、逃げている訳じゃなくて実はその演技をすごく大切にしているってことで、心に嘘をつけないから悩むんですよね。その演技を自分のものにしたところを撮って「オッケー！」って言えた時が最高に気持ち良いです。そうやって最後の最後まで真剣にやっているから、視聴者にも通じるところがきっとあるんだなあと信じて作っています。その真剣さが現場にも浸透しているから、スタッフ全員も何とかそれを撮るために燃えちゃうんですね、きっと。本当にすごい男だなとリスペクトしています。

お互いに熱く、素晴らしい関係ですね。

役に生きる俳優陣を愛し、寄り添って撮りました。ランクアップの時には、圭くんと鋼太郎さんと抱き合って大号泣しちゃいました(笑)40歳にもなってそういう気持ちになることってなかなか無いですよね。それだけ思い入れが強かったんだと思います。どんな形かは分からないんですけど、必ずまたこのチームで一丸となって一緒にやりたい。本当に好きなチームだったので、今は撮影が全て終わってしまい少しセシメンタルです。

これからもYuki Saito監督の作品に期待しています！最後に、2020年の目標を聞かせてください。

映画監督としては来年新作が公開されるので、一人でも多くの人に観てもらって、次なるステージへと繋げることが目標です。(まだ未発表なので内容は言えないのですが)長崎を舞台にした長編映画です。情報解禁された際には、こちらの連載でもまた自分の言葉で伝えたいと思います！

そして、海外を目指し同じマインドの監督・脚本家仲間5人で立ち上げたクリエイターズレベル「SOLO(ソロ)」での活動がやっと形になりました。1年かけて下地・チーム作りをしてきましたが、2020年は作品を世に放ちたいと思います。こちらも続報をお楽しみに!!

